視察研修報告

教育経済常任委員会

宮城県登米（とめ）市
農業生産額一日一億円の現場を視察

登米市は宮城県北部に位置し、平成17年に登米郡8町と本吉郡津山町が合併して誕生しました。人口は約8万人で、面積は536㎢、耕地面積は33%という農業中心の地域です。

農業振興

主要産業は農業で、平成19年に登米市農業生産1日1億円創出プランを策定し、平成24年に年額369億5千万円を達成した。その後は未達であるが、恒常的な達成に向け努力しているという。

農業経営体は6千306戸で、稲作面積は1万325ha、養豚6万7千579頭など、宮城県内で1位となっている。

【畜産】

登米市の1戸あたり平均和牛飼養頭数は28頭であるが、全飼養頭数は2万5千402頭で、本州最大の和牛産地である。また、仙台牛の4割以上を生産している。

委員会は、耕種と畜産の複合経営を行っている㈲エヌ・オー・エーを視察した。同社の経営規模は水田（転作を含む）120ha、和牛飼養頭数は1000頭、推定収入額2億円であるが、従業員数はわずか6人。

高橋良代表から、48㎜径のパイプで組まれた牛舎で説明を受けた（雪の降らないところはいいな）。牛舎は、肥育棟、生産棟、子牛棟の3棟で構成されており、生産棟では高橋代表のお父さんが濃厚飼料を母牛へ与えておられた。

水稲は、多収品種を不耕起直播で栽培しており、雪の降らない冬場に稲ワラをロールして和牛の素飼料にしている。転作は、秋から冬に掛けて麦を作付け。6月に刈り取り、7月にロールし飼料化、その後大豆を作付けしているという。

説明を受けている間も、100馬力はあろうかと思われる3台の大型トラクターで集草とロール作業。それを追いかけるようにプラウ（鋤）で土煙を上げながら耕している。耕やすとすぐに大豆を播くそうだ。

飼料原価、作付け原価は、飯南町とは比べ物にならないほど安いことが容易に推察できた。

【園芸作物】

登米市のキュウリ、キャベツは国の野菜指定産地に指定されている。

キュウリは4月から11月まで安定出荷されており、産出額は7億7千万円、作付面積は36ha。キャベツは約1億円を69haで産出している。

委員会は、育苗施設なかだ農業開発とJAみやぎ登米胡瓜選果場を視察した。育苗、生産、選果（荷造）が完全分業体制となっており、農家負担の軽減を図っている。

育苗施設は、キュウリ、ナス、トマト、キャベツ、白菜、トルコキキョウなど227万3千本の苗を生産、内キュウリが53万5千本を占める。

胡瓜選果施設は日処理量24万9千本、5kg箱にして4千980箱を処理できる。

教育振興

【小中一貫教育　豊里小中学校】

豊里小中学校は、登米市豊里地区に建つ校舎一体型小中一貫校だ。

一貫校設置の背景には、基礎学力の定着不足、不登校、問題行動があった。これに取り組んで、9年後までの教育プロセスが明確となり、中1ギャップが解消されたという。また、児童生徒の交流を通じた社会性の育成が図られたようだ。

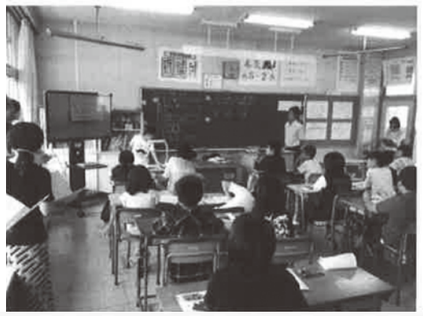
反面、教職員はさらに多忙となり、小中の異なる生活（時間割、クラブ活動など）の棲み分けが必要となったそうだ。

当初は、児童の心理的発達を考慮し、9年間を3・4・2制に区切り、前頭前野の急激な発達期、形式的操作の可能期と学年とのギャップを解消する目的であった。

当時は優秀な教員が派遣されてきており、学力にも顕著な効果が現れたが、転勤が進む中で学力の維持が困難となった。

また、中学校1年のクラブ活動が他校と整合が取れ無いなどの問題が生じてきたため、現在は3・3・3制にされている。

小中合同の校内授業研究



共に学ぶ: 9年生が1年生に読み聞かせ

慰霊

【石巻市立大川小学校】

平成23年3月11日の東日本大震災。大川小学校では地震のあと、校庭で待機していた78人の児童を北上川を遡上してきた津波が襲い、一瞬にして飲み込んでしまった。生存者はわずか4人であった。

津波は2階建て校舎の屋根を超え、窓や戸はすべて破壊されている。鉄筋コンクリートだけになった小学校の建物は、当時のすさまじい津波の力で捻じ曲げられていた。

私たちはただ息を呑み、手を合わせるだけであったが、他山の石とせず、飯南町の防災への取り組みに尽力したい。